

おいで 野洲まるかじり協議会って？

～「おいで野洲まるかじり協議会」が考えていること～

地産地消をめぐる課題

いま日本では、景気の後退や人口減少、少子高齢化、食の安全など、さまざまな課題があります。地方においても同様で、苦しい状況が続いています。

しかし地域では様々な作物や製品が産出されており、いつ、どのようなものが産出されているか、また消費者はなにを求めているか、どこで販売されているか、システムが確立されていません。このような情報が一元化され、生産者、消費者、販売者などがそれぞれ有効に活用されれば、地域の経済の活性化につながっていくものと考えます。

私たちが目指すこと

これらの現状を打破するために、拠点施設の整備を念頭におきながら直売店のネットワーク化を進め、これを核とした移動販売やデリバリーサービスを行うなど、地域の実情にあった公共的な機能を付加し、地域の“もの”を地域で消費でき、しかも地域通貨を介在させることにより、環境に配慮した『地域グリーン経済』のモデル的な活動になるよう進めていきます。

また、携帯電話のQRコード利用やインターネットの整備など、情報発信が容易にできるシステムをつくり、新たな直売店の方向性を探ります。

期待される効果とは

直売店の情報化により、多くの情報をリアルタイムに消費者へ提供できるようになります。またネットワーク化により、学校給食や企業の社員食堂への食材を安定して提供できることが可能となります。

生産者の情報交換の促進や、技術交流による品質向上、新商品の開発が期待できます。地元加工業者との連携により、地元食材を原料とした加工品やコラボ商品の開発など、付加価値のある特産品の創出が可能になります。

高齢世帯や独居老人が多いエリアに、移動販売やデリバリーサービスを行うことにより、生活環境の改善が図られ、老人の安全確認など福祉の観点からも、大きな役割を果たすことができます。

地産地消が進むことにより、地域内自給率のアップが図られ、生産者の所得や意欲の向上、事業拡大による雇用創出にもつながります。また、物流や買物客の移動距離の短縮によるフードマイレージの削減、地域通貨の売り上げによる太陽光発電への投資などより、『環境と経済の両立』に貢献できます。

これらの取り組みが、新たなコミュニティビジネスにつながる可能性も生まれます。

自分で考え、工夫を凝らす 農業に新しい風が起こる予感

いちご園フェリーチェ 農園長 南出卓哉さん

手の平いっぱい巨大イチゴを食べ放題できるいちご園フェリーチェ。誰もがイチゴ摘みの楽しさを体験できるよう温室はバリアフリーで設計され、車イスでもゆっくり通れる広い通路が備えられています。

南出さんはこの農園の三代目で、大学では経営学を専攻。畑違いにも思えますが、だからこそ、これまでにない農園づくりの発想ができるのかもしれません。「これからの農園経営は、人まかせ、市場まかせではダメ。安価な相場に左右されない商品や売り方を自分たちで考えていくことが大切」と、南出さん。まるかじり協議会に参加した理由を伺うと、「いろんなお店や人とのネットワークを広げるきっかけにしたい」。これまでもケーキ屋さんや牧場とのコラボで新商品を生み出し、現在は農園にカフェを計画中とか。熱い語りのなかに、農業の在り方が変わっていく、新しい風を感じる事ができました。



個々の力を結集させて みんなが潤う幸せの輪を広げたい

すまいる市 店長 辻村美喜子さん

すまいる市は、野洲駅前ほほえみの湯入口横にある小さなお店。店内には、辻村さんの元気いっぱいの声が響きます。「皆さんから、ここに来ると元気がもらえる、と言われます」と、満面の笑顔。現在、目指されているテーマを尋ねると、「農家はたとえ実力があっても、個々の力には限界があります。それぞれの良いところを集めて、大きな力にして、生産者と消費者の幸せの輪を広げたい。お客様にも喜んでいただき、生産者も潤う。そのために情報を集めて発信していく拠点になりたいと考えています」。また、「お客様には琵琶湖や地域の環境の大切さを伝え、環境を考える機会を少しでも多く持っていただきたい」とも。

モノを売るだけでなく、自分が良いと思う様々な情報発信を続ける辻村さん。最後に「夢は?」とお聞きすると、即座に「世界進出!」。あふれるパワーは、本当に世界に通用するかもしれません。

